歴史地理学　50－3（239）15～31　2008. 6

宗教集団をめぐる社会－空間的排除のプロセス

―1930年代の「美濃ミッション事件」を事例として―

麻　生　　将

Ⅰ．はじめに
(1)「異(い)なるもの」をめぐって
(2) 研究の目的
Ⅱ．美濃ミッション事件とその背景
(1) 美濃ミッション略史と地域概観
(2) 美濃ミッション事件について
(3) 事件の時代的背景
Ⅲ．美濃ミッション事件に関わったアクター
(1) 市民による排撃運動
(2) 地元紙への投書
(3) 有識者による陳情活動と幼稚園閉園運動
Ⅳ．美濃ミッションをめぐる社会－空間的排除の論理
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

(1)「異(い)なるもの」をめぐって

グローバル化あるいはトランスナショナル化する現代日本社会は，様々な言語・宗教・文化的背景を持つ人々の流入を経験している。と同時に，例えばオウム真理教のような，「普通」と思われてきた価値観や社会の枠組みや規範を否定する（かのように思われる）集団も出現している。こうした集団や個人は，彼らを取り巻く地域社会によって「異(い)なるもの」と見なされる。「異なるもの」は，赤坂によると「そのつどあらたに発見され，つくられる」場合が多く[1]，その中で緊張や軋轢が生じ，社会的もしくは空間的に排除される事例が少なからず存在する[2]。これは中村が述べるように「いつの時代にも，またどんなところにもある，人が人を『排除』するという避けがたい人間社会の事実」[3]であると言えるかもしれない。

宗教集団の場合は特にその価値観，規範等が教義・教典といった形で当該集団において明確かつ強固に共有されており，「異なるもの」というまなざしを周囲の地域社会からしばしば向けられてきた。とりわけ，新たな宗教集団の出現が社会的混乱を引き起こし，場合によってはそうした集団がホストである地域社会から排除・排撃の対象とされる事例については，地理学や社会学などにおいていくつか指摘されてきた[4]。

しかしながら，特に近代以降において，地域社会が宗教集団を「異なるもの」とみなす過程で，地元新聞をはじめとするメディアが重要な役割を果たしたことに着目した研究は必ずしも多くはない。あらためて述べるまでもなく，新聞はそれぞれの時代や社会を構成する個人・集団（団体）の言説を反映するとともに，新たな言説空間を生み出すものである。そこで本稿では，新聞報道によって一旦，当該地域において受容された宗教集団がどのように「異なるもの」として「そのつどあらたに発見され，つくられ」[5]ていったの

キーワード：異(い)なるもの，社会－空間的排除，美濃ミッション，大垣市，ヘテロトピア

か，その受容と排除のプロセスについて考察を加える。

(2) 研究の目的

ところで，こうした「異なるもの」は社会的に排除される場合もあるが，同時に空間的にも排除される。「社会的」という一見非物理的な現象は，時として「空間的」すなわち物理的な現象を持ち合わせて生じる。すなわち，エドワード・ソジャ（Soja, E.）が提唱した「社会－空間弁証法」[6] の考え方に基づくならば，「異なるもの」をめぐる一連の排除を「社会－空間的排除」と言うことも可能であろう。

では，「異なるもの」と見なされた集団・個人の排除を正当化するものとは何か。例えばシブレイ（Sibley, D.）は，「（普通の人々にとって）安全な境界線の維持は，常に容易というわけではない，なぜなら（異なる人々と）混じることや異質な存在に対して『恐怖』感を持つ人々は，（異質な存在が）彼ら自身の中に入るのを規制する力を失っているかもしれないからである」（括弧内は筆者による）と述べ，人間は，自分とは「異なるもの」に対して「恐怖」感を抱く一方で，「異なるもの」と一線を画することが時として困難であることを挙げている[7]。

以上のことを踏まえ，1930年代前半に岐阜県大垣市において生じた「美濃ミッション事件」を事例に，特定の宗教集団がどのような論理で「異なるもの」として意味づけられ，大垣という空間からどのように排除されていったのかについて言及することを本研究の目的とする。

分析に使用した史資料は『大垣市史』や『岐阜県史』をはじめとする地方史や当時の新聞記事[8]，1930年に文部省（当時）と岐阜県に提出された『美濃ミッション設立願書類綴』（図１）等の資料や，美濃ミッションから出版された『神社参拝拒否事件記録』，そして美濃ミッション発行の定期刊行物『聖書の光』（2000.3春号～2005.3春号）である。また，2005年３月と12月に行った美濃ミッションの関係者への聞き取り調査の内容も参照する。

図１　美濃ミッション設立願書類綴

注：美濃ミッション蔵、2005.12.28筆者撮影。

Ⅱ．美濃ミッション事件とその背景

(1) 美濃ミッション略史と地域概観

美濃ミッションとは，1918年にアメリカ人女性宣教師ワイドナー（Weidner, S. 1875～1939年）によって大垣市に設立された，プロテスタント系のキリスト教団である（図２）。前述の『美濃ミッション設立願書類綴』によると，ワイドナー自身はアメリカ合衆国の改革派教会の出身であったが，美濃ミッションは単立の教団として設立された。

ワイドナーは，元々教育者として1900（明治33）年に来日し，仙台の私立宮城女学校（現宮城学院女子大学）で13年間校長を務めた。その後，1918（大正７）年に大垣市郭町の戸田伯爵家老屋敷（図２）を借り受けて，「美濃ミッション」というキリスト教団とそれに付属する「私立大垣基督教幼稚園」（以下，基督幼稚園とする）を設立し，大垣市を中心とする岐阜県西部にて布教活動を開始した。この幼稚園には主に市会議員や医者の子

図２　美濃ミッション本部の外観

注：美濃ミッション所蔵写真を使用。

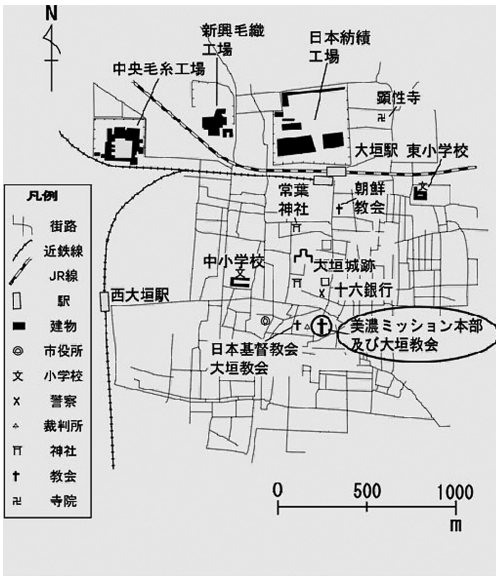

図３　対象地域概観

注：内務省地理調査所作成25000分の1地形図（昭和22年版），昭文社発行都市地図　岐阜県２　大垣市，2004，『日本基督教会「大垣教会90年の歩み」』135頁をもとに作成。

どもが通園したという[9]。そして，大垣市を中心とする岐阜県西部に支部教会を設立，複数の日本人牧師やスタッフが美濃ミッションに入団し，布教活動を展開していったのである[10]。

ワイドナーが美濃ミッションを設立した大垣市は，戸田藩の城下町であった。戸田藩は江戸時代を通じてたびたび勧農政策を行っており，主要な産業は農業と綿織物であった[11]。図３は1930（昭和５）年頃の大垣市の中心市街地を示したものであるが，市街地周辺部，特に1889（明治22）年に全線開通した東海道線沿線に大規模な紡績・繊維関係の工場立地が見られることから，明治時代以降，大垣を中心とする岐阜県西部が紡績・繊維産業の一大集積地となったことがうかがわれる[12]。

美濃ミッションは，市会議員や医者などの上層階層のみならず，こうした紡績・繊維関係の工場で働いていた出稼ぎの女性労働者に対しても布教活動を行っていた。1930年に文部省と岐阜県に提出された『美濃ミッション設立願書類綴』によると，この段階で大垣市の日本紡績の社宅と不破郡関ヶ原町の日本紡績の寄宿舎に居住していた女性信者は計29名であった（表１）。また，県外に本籍を置いていた信者24名中20名は女性であったが，このうち幾人かは県外からの出稼ぎ労働者であったと推察される。

この他にも，美濃ミッションは在日朝鮮人や寡婦，母子家庭の親子への積極的な保護と布教活動を行っていたのである[13]。

このように当時の社会にあって上層階層のみならず，周辺化された人々を積極的に内包していった美濃ミッションに対して，地元社会は日常的に，あるいはそのつど「異なるもの」という眼差しを向けていたと考えられる。

表１　美濃ミッション信者・スタッフ・宣教師の在住・本籍地

住　所		男性	女性	不明	宣教師	計
岐 阜 県	大垣市郭町	1	4	1	3	9
	大垣市歩行町	1				1
	大垣市西崎町	1	1			2
	大垣市鷹匠町	1	1			2
	大垣市藤江町	3	4			7
	大垣市東長町	1				1
	大垣市東代官町	1				1
	大垣市南寺内町	1	1			2
	大垣市田町北ノ町	1	3			4
	大垣市林町日本紡績・日本紡績住宅	1	18			19
	大垣西船町製糸工場		1			1
	大垣市木戸町中央毛糸		1			1
	大垣市室町		1			1
	大垣市林町	1	1			2
	大垣市久瀬川町	1				1
小　計		14	36	1	3	54
岐 阜 県	安八郡多芸島村		1	1		2
	安八郡大藪町			1		1
	安八郡中川村林	1				1
	安八郡二木村下新田			1		1
	安八郡福東村		1			1
	武儀郡美濃町	2	3			5
	揖斐郡本郷村字山洞	1	1			2
	揖斐郡揖斐町三輪		3			3
	揖斐町若山医院方	1				1
	揖斐町栄町	1				1
	本巣郡北方町	1				1
	不破郡関ヶ原町日本紡績舎宅・寄宿舎	1	11			12
	養老郡高田町	1				1
	養老郡高田町東町		1			1
	養老郡高田町北町		1			1
	養老郡高田町北横町	1	1			2
	養老郡一ノ瀬村川東		1			1
	郡上郡川合村	1				1
	郡上郡八幡町	2	5			7
	加茂郡黒川村	1	1			2
小　計		14	30	3	0	47
福 島 県			1			1
長 野 県		1	2			3
新 潟 県			6			6
栃 木 県			1			1
東 京 都				1		1
福 井 県			3			3
愛 知 県		1	2			3
大 阪 府			1			1
京 都 府		1				1
兵 庫 県			1			1
鹿児島県			3			3
小　計		3	20	1	0	24
住所記載無し		10	6			16
小　計		10	6	0	0	16
合　計		41	92	5	3	141

注：『美濃ミッション設立願書類綴』より作成。

(2) 美濃ミッション事件について

美濃ミッション事件は1929年～1930年と，1933年の２回生じている（表２）。この事件は，美濃ミッションに対して向けられた，PTAや地元出身の政治家，マスメディアといった地域社会の諸主体（アクター）による排撃運動のことである。同事件を略述するならば，以下のようになる。

1929年９月，大垣市立中小学校の恒例行事であった秋の常葉神社祭礼の際に，美濃ミッション所属の４児童が信仰上の理由から参拝を拒否し，担任に早退を申し出た。学校側は

表２　美濃ミッション事件概略史

年月日	事項
1900.6	ワイドナー宣教師（以下，ワイドナー）初来日
1918.8	ワイドナー，独立宣教師として再来日
1918.11	大垣市1054番地にて「美濃ミッション」活動開始
1919.5	大垣市1054番地にて「私立大垣基督教幼稚園（以下，基督幼稚園）」開園
1920.5	戸田伯爵所有の家老屋敷（大垣市郭町15-1）を借り受け，同地に「美濃ミッション本部」及び「私立大垣基督教幼稚園」（以下，基督幼稚園とする）移転
1925.7	伝道師伊能倉治郎･かく夫妻，美濃ミッションへ入団
1926.1	ミラー宣教師，初来日
1927.2	山本豊入団，聖書分冊配布に従事
1927.6	伊能倉治郎・かく夫妻，養老郡高田町の伝道館専属となる
1928.4	野原勘由，美濃ミッション管理補佐に就任
	フィウェル宣教師初来日
1928.5	菊池三郎，美濃ミッションへ入団
1928.11	駒井梅，揖斐教会牧師に就任
1929.4	萩原荘三が美濃ミッションへ入団，張道源が美濃ミッション大垣朝鮮教会牧師に就任
1929.9	常葉神社祭礼の際，美濃ミッションの児童４名が参拝を拒否
1930.3	神社参拝拒否，連日関連記事報道
1930.4	「市会憤議に燃ゆ」との報道
1932	山中為三が美濃ミッション聖書学校校長に就任
1932	柳瀬直彌が美濃町教会（美濃ミッションの支部教会）牧師に就任
1933.6	美濃ミッション児童が伊勢神宮参拝拒否を理由に修学旅行に不参加
1933.6～9	美濃ミッション児童による伊勢神宮参拝拒否をめぐる新聞報道
1933.7	美濃ミッション排撃の市民大会，基督幼稚園の閉鎖運動，路傍伝道妨害などが報じられる
1933.7	７月25日から10日間市内各地で排撃運動，在郷軍人会会長が排撃の決議文を表明
1933.8.21	父兄会・校友会が全校同盟休校を表明，美濃ミッションの３児童に停学処分
1933.8.22	美濃ミッションの全居住者15名が大垣警察署に召喚
1933.8.26	菊池･山中･柳瀬の３牧師が大垣警察署に召喚，教会行為停止と賛美歌禁止の命令を受ける
1933.9.20	ワイドナー・菊池･山中･柳瀬が上京，内務省警保局にて意見交換
	その後，排撃運動自体は自然終息
1934.1	基督幼稚園，正式に閉園
1936-37	伝道師樋口ふじの・ジューリア・本山春江・バーワ・パップらが美濃ミッションへ入団
1939.1	教役者８名が美濃ミッションを退団
1939.12	ワイドナー死去
	フィウェル宣教師がアメリカに帰国
1940	伊能倉治郎が美濃高田を離れ東京へ移ったことを契機に，美濃ミッションは活動を中断
1942	伊能倉治郎・山中為三両氏検束
1946.10	フィウェル宣教師再来日，美濃ミッション活動再開

注：『神社参拝拒否事件記録　復刻版』，『美濃大正新聞』，『岐阜日報』，『大阪朝日新聞』をもとに作成。なお，表中の1940年の活動中断について，おそらく太平洋戦争中には礼拝や布教などの宗教活動を中止していたものと思われるが，史資料の制約により具体的な状況は明らかではない。

後日，このうち２名の児童の保護者とワイドナーを呼び出して指導を行ったところ，彼らも信仰上の理由でこの指導を拒否した。

やがて，地元紙の美濃大正新聞が翌30年の３月から５月にかけてこうした一連の出来事を報じ始める[14]。それによると神社参拝拒否は大垣市議会で議題となり，美濃ミッションに対する非難が市議会で噴出した[15]。また，学校教師による美濃ミッション批判の投書が美濃大正新聞に複数掲載された。その結果，美濃ミッションによる路傍伝道の一時的な衰退が見られ，大垣市の繊維関係の工場での布教に対しても風当たりが厳しくなったという[16]。また，礼拝出席者も減少し，幼稚園の退園者が数名出るに至った。だが，このような状況の中，1930年３月15日付けの『美濃大正新聞』によれば，ワイドナーは聖書の一節を引用し，神社参拝拒否を一貫して主張したのである。

こうした一連の報道や出来事が美濃ミッションの活動に礼拝出席者の減少などの影響を与えたものの，特に大規模な排撃運動が生じることもなく，やがて新聞報道の減少とともに，「事件」は自然に終息していった。

しかし，それから約３年後の1933年６月に，大垣市立東小学校に通う美濃ミッション所属の児童ら[17]が，修学旅行での伊勢神宮参拝を信仰上の理由で拒否し，修学旅行への不参加を申し出た。これを契機に美濃ミッションを取り巻く状況は大きな変化を見せる。すなわち，修学旅行不参加の申し出をめぐって学校側は，児童とその母親，そしてワイドナーに対して指導を行ったが，彼女らが信仰上の理由により，この指導を拒絶したことをめぐって事件が再燃したのである。

こうした一連の経過を，同年６月下旬から10月初旬にかけて岐阜県下の複数の新聞社が大々的に報道する一方で，有識者や大垣市民らによる美濃ミッションの排撃運動や，美濃ミッションに付随する基督幼稚園の閉園運動が展開された。やがて大垣市教育委員会は８月，参拝拒否を表明した児童らに対して小学校令第38条の性行不良を理由に出席停止，事実上の停学処分を下した。そのため，彼らはそれぞれ市外の私立学校に転校を余儀なくされるに至ったのである[18]。

こうした一連の「事件」の最中，ワイドナーをはじめ数名の美濃ミッションの関係者はたびたび警察に召喚されたが，彼らは一貫して神社参拝拒否を主張し続けた。また，10月５日には「全国基督信徒に告ぐ」というタイトルの声明を発表し，この中で３児童の，キリスト教信仰に基づく神社参拝拒否の正当性や，美濃ミッションへの一連の排撃の不当性を訴えた[19]。

その後，美濃ミッションへの排撃運動に関する報道は，基督幼稚園の閉園や３児童の転校といった出来事があった後，同年９月頃から減少し，表立った「事件」は，次第に終息していったと考えられる[20]。

(3) 事件の時代的背景

美濃ミッションをめぐるこうした事件の背景として，満州事変以降の国家権力による宗教集団・思想への統制・弾圧が挙げられる。特に，美濃ミッション事件の大きな焦点となった，公立学校での神社参拝に関しては，1931（昭和６）年の満州事変勃発以降，文部省（当時）によって「神社参拝を児童生徒の校外教育の一環として本格的にすすめ」られていたことが大きく関係している。すなわち，満州事変以降，国家権力によって「国威宣揚・武運長久・戦勝祈願の祈願祭」への「在郷軍人会・消防組・青年団・婦人会・小学校・自治組合・氏子など地域のあらゆる団体の計画的組織的な動員」が実施されていった[21]。

そして，神社参拝をはじめとする，こうした国家権力による思想統制が次第に強化されていく中，1935（昭和10）年の大本をめぐる一連の弾圧事件[22]に代表される，主に特定の

新宗教やキリスト教の集団に対する統制・弾圧事件が次々に発生した。美濃ミッション事件はこのような時代に，大垣市という地方都市において生じた「事件」なのである。

Ⅲ．美濃ミッション事件に関わったアクター

(1) 市民による排撃運動

先述のように，この事件の中で，教育関係者や行政関係者，在郷軍人会，大垣市民といった多様なアクターが美濃ミッションの排除に向けて様々な活動や言説を展開したことが，当時の新聞記事に見て取れる（表３）。本章では，特に排撃運動がより顕著であった1933年の事例について，当時の新聞記事を参考に見ていきたい。なお，日付は全て1933年のものである。

まずは大垣市民のうち，有志による美濃ミッション排撃運動であるが，７月６日の『大阪毎日』の紙上に初めて登場する。

> 大垣市キリスト美濃ミツシヨンに絡まる神社否定参拝拒否問題は，ごうゞたる非難のうちにあつて（中略）中小学校後援団体興文会では同協会（ママ）閉鎖要望の決議をする事になり一方市民有志は同ミツシヨン弾劾演説会市民大会を開く事になつた。（『大阪毎日』７月６日）

そして，その市民大会が7月16日に開催されたことを次の２紙が以下のように報じている。

> 伏魔殿美濃ミツシヨンを閉鎖せよとの声は今や（中略）きう然として挙げられるに至つた。この時に当つて大垣市有志になる（ママ）「美濃ミツシヨン排撃市民大会」を十六日午後八時より郭町日吉座において開催宮脇本県知事並に鳩山文部大臣に提出すべき決議文を附議するはずである。（『美濃大正新聞』７月16日）

> 大垣市美濃ミツシヨンの神社参拝拒否問題につき十六日午後八時から日吉座で市民大会を開催（中略）経過報告や多数弁士の演説に次いで（中略）左の決議を満場一致可決，鳩山文部大臣と宮脇本県知事に送達することになつた（『大阪朝日』７月18日）

この市民大会において中・東両小学校長や複数の弁士による経過報告と演説が行われたという。そして大会の最後に，美濃ミッションを大垣市ひいては「帝国の版図」から排除することを目指す決議が以下のように採択された。

> 決議　美濃ミツシヨンの固持宣布する神社参拝拒否の思想は我帝国の精華たる敬神崇祖の信念を蹂躙するものなり因つて吾等はその根源□除のため凡ゆる努力を益し同所経営の無認可教会及びその宣教の禁止，幼稚園閉鎖を断行以て帝国の版図より悪思想を駆逐せんことを期す（『大阪朝日』７月18日，□は判読不可能な文字。）

また，一部市民による日常的な暴力があったことも報じられている。

> （前略）神社参拝を断然拒否して今や県下百数十万の民衆の激怒を買へる美濃ミツシヨン経営主ワ女史一行の伝道隊（中略）を取り囲んだ数百人の民衆は一行中の日本人牧師に向ひ「貴様はそれでも日本人か！」「国体の理解の出来ぬ毛唐を補佐して日本を売るつもりか！」などゝ口々に罵倒し，事態容易ならざる形勢に立入つた（後略）（『美濃大正新聞』７月25日）

表 3　美濃ミッション事件をめぐる主な新聞記事の見出し（一部）

年月日	新聞社	主要見出し（キーワード，一部内容）
1930.3.13	美濃大正	「小学児童の神社参拝を拒否　国民思想を根底から覆す　大垣市会の問題となる」
1930.3.13	美濃大正	「幼児に反国家的思想を　由々しき一大事」
1930.3.14	美濃大正	「脅迫的言辭で大野校長に迫る　大野校長憤然として語る」
1930.3.14	美濃大正	「ワイドナー事件重大問題となる　県の学務部長も憤慨した　或は大鉄槌降下か」
1930.3.15	美濃大正	「学校の方針に従はねば児童の入学拒絶　ワイドナー氏問題につき市当局の態度決定」
1930.4.25	新愛知, 岐阜日々，報知	「ワイドナー事件で市会義憤に燃ゆ　慎重なる調査研究の上で　文部当局へ意見書提出？近く大鉄槌下らん」
1933.6.21	岐阜日報	「無許可の教会　困つた幼稚園経営　県当局の断乎たる処置を　大垣市視学神野正二氏談」
1933.7.6	大阪毎日	「美濃ミツシヨンの神社否定問題　閉鎖要望の声高まる　近く市民大会開催か」
1933.7.16	大阪朝日	「美濃ミツシヨン閉鎖を要望　今夜市民大会を開き」
1933.7.16	美濃大正	「美濃ミツシヨン問題　上田中将等　けふ出発　県当局の処置促進陳情」
1933.7.18	大阪朝日	「美濃ミツシヨン排撃決議　大垣市民大会」
1933.7.25	美濃大正	「ワ女史の伝道隊　民衆と正面衝突す！！事態俄然急迫！当局はこれをなんと裁く？」 「ミツシヨン児童の入校拒否決議　西校後援役員会」
1933.7.25	大阪毎日	「宣教師　激昂の市民遂に正面衝突　各所に小競合　『美濃ミツシヨンを葬れ』大旆押し立てて殺到」
1933.7.25	岐阜日報	「路傍伝道に詰問を発す　ワイドナー女史一派に大垣市民の反感！！」 「美濃ミツシヨンの幼稚園閉鎖要望　大垣市公機関乗出す」 「断乎排撃を決議・美濃ミツシヨン問題と不破郡教育会評議員会」
1933.7.26	美濃大正	「美濃ミツシヨン閉鎖決議　南学校相〇会」「打倒檄文配布」「排撃演説会」　※「〇」は判読不能な文字
1933.7.29	美濃大正	「徹底的にミツシヨン排撃　きょう中小学校で協議会」
1933.7.29	岐阜日報	「帝国から邪教を追え！揖斐郡下から要望」
1933.7.30	大阪朝日	「美濃ミツシヨンは断然不許可に内定　近く文相から正式に指令　懸案を解決し宮脇知事帰る」
1933.7.30	美濃大正	「美濃ミツシヨンは不許可に決す　鼻高々＝宮脇知事帰る」 「大垣在軍分会　ミツシヨン排撃決議文提出」
1933.8.1	岐阜日報	「美濃ミツシヨン不許可と各運動　幼稚園にまでも及ぶ」「排撃に一致　岐阜奉仕委員会」
1933.8.1	岐阜日日	「二三日中に不許可の指令　美濃ミツシヨン問題　文部省の方針決定」 「呼応して岐阜市奉仕委員立つ　美濃ミツシヨン問題」
1933.8.2	美濃大正	「委員を挙げて排撃に邁進　ミツシヨン問題に岐阜市起つ　在郷軍人会も蹶起か」
1933.8.3	岐阜日報	「美濃ミツシヨンを早くやつつけろ　両市の奉仕委員ら陳情」
1933.8.6	岐阜日報	「美濃ミツシヨン不許可の指令到着す　知事の歸廳後正式却下」 「幼稚園も閉鎖　不許可後の教会行為は厳罰す　北里学務部長語る」 「市民は合法的に実力で閉鎖せよ　…大野代議士談」
1933.8.6	大阪朝日	「美濃ミツシヨンに断然閉鎖を命ず　所属教会十四は悉く不許可　宮脇知事帰庁後，発令」
1933.8.6	美濃大正	「美濃ミツシヨン設立不許可　文部大臣の指令来る　県当局は断乎処置」
1933.8.8	美濃大正	「護れ国体，葬れ邪教　興文会が作製」
1933.8.8	岐阜日報	「美濃ミツシヨン幼稚園　実力閉鎖の第一歩　退園届に捺印取纏め」
1933.8.11	岐阜日報	「美濃ミツシヨン排撃　布教と幼稚園問題に就て　全県民の民衆運動は継続」
1933.8.12	大阪毎日	「美濃ミツシヨン排撃運動　高田町民大会」
1933.8.17	岐阜日報	「美濃ミツシヨン看板を撤去　この上は同所経営にかゝる幼稚園の閉鎖をまつ」
1933.8.22	岐阜日報	「役員を定め恒久運動　美濃ミツシヨン反対の学童参拝拒否研究会か」 「ワイドナー女史きのう出県　知事との会見中止」
1933.8.23	岐阜日報	「神社参拝を拒否せる三児童に出席停止　悔悟の見込みなく輿論沸騰に大垣中，東両校長決意」 「敬意を払ふべき両校長の態度　市は今後も強硬態度　神野大垣市学務課長談」
1933.8.29	岐阜日報	「教会行為を禁止　大垣市民に凱歌揚る　今度は幼稚園の実力閉鎖に進む　美濃ミツシヨン問題の転換」
1933.9.6	岐阜日報	「ミツシヨン問題真相発表演説会　九日友江南徳寺にて」

こうした民衆による罵倒が，当時のナショナルな風潮を背景にしていることは，改めて述べるまでもないであろう。

(2) 地元紙への投書

事件当時，美濃ミッションをめぐる様々な投書が地元紙『美濃大正新聞』に寄せられていた（表４）。事件の舞台が小学校であったことや，事件の内容が教育・思想に関わることであったためか，主に学校関係者からの投書が大半を占めている。記事の多くは，美濃ミッションそしてワイドナーに対する非難であるが，より詳細に見ると，ワイドナー並びに美濃ミッション固有の思想・態度をめぐる言説とともに，キリスト教という宗教そのものが日本の国体と相容れないという批判がみられる。これは，ナショナルな文脈でのキリスト教批判の言説であるとみなすことができよう。

いずれにせよ，ワイドナーが日本の国体と日本的な神観念について誤解している，との前提に立った内容であるが，ここで注目すべ

表４　美濃ミッションおよびワイドナーの態度をめぐる投書の見出し

年月日	新聞社	主要見出し・投稿者	内容
1933.6.22, 23, 24	美濃大正新聞	「神社参拝拒否の問題について　東小学校(文責　高木)」	「祖先崇拝は日本人として当然，聖書は非科学的，現人神である天皇信仰を拒否すること＝安寧秩序を妨げ，国民の義務に背く最大のもの」
1933.6.29	美濃大正新聞	「神社参拝と基督教　佐藤生」	「外国人宣教師と我々日本主義のキリスト信者を混同することを迷惑である，松岡洋介はキリスト信者だが神社参拝を行い，我々の模範である」
1933.6.30	美濃大正新聞	「神社参拝につき佐藤氏に答ふ　高木生」	「一部のヤソ教徒に向けて言われる議論，佐藤氏の主張を認める」
1933.7.1	美濃大正新聞	「神社問題に就て佐藤君に望む　桂蔭生」	「佐藤氏はなぜ彼ら（＝美濃ミッション）に反省を促さずに，自分たちと彼らを十把一からげにされたくないと言うのか」
1933.7.2, 7.4	美濃大正新聞	「神社問題雑拾＝一基督教徒の立場より＝(上)(下)　浅倉生」	「およそ祖先，国忠の士を祭る神社に対して礼を尽くし，敬意を表するのは当然，これはキリスト教信仰と差し支えない。美濃ミッションに対する反省の促し」
1933.7.6	美濃大正新聞	「神社参拝拒否問題につき佐藤君に問ふ　倉橋生」	「キリスト教は他の神々を否認するので日本の国体と相容れない。神を単なる祖先崇拝だけで見ることは国体の破壊である」
1933.7.7	美濃大正新聞	「神社参拝問題は二つの誤解　岩瀬鍈一」	「神社参拝拒否問題はキリスト教一般ではなく美濃ミッションに限定すべきである。外国人宣教師は日本の神社に対して誤解しているため，市当局の誤解と反省の促し」
1933.7.22, 23	美濃大正新聞	「美濃ミツシヨン問題討論壇　美濃ミツシヨンを葬るべからず　木村知常」	「神社参拝拒否はワイドナーの誤解である」
1933.7.28	美濃大正新聞	「ミツシヨン問題討論壇　美濃ミツシヨンを葬るべし　西濃生」	「ワイドナーのような外国人に日本の国体は理解できない，『われわれ市民として国民として…』」

きは，こうした言説が美濃ミッション以外のキリスト教関係者によっても生み出されている点である。例えば日本基督教会大垣教会の佐藤長老は，

（前略）我々日本主義のキリスト信者にとつては迷惑千万である。（中略）美濃ミツシヨンと称する我国体も我国民性も無視して絶へず神社参拝を拒否せんとする団体はあるが，彼等に対しては一般基督教徒は顰蹙し憤慨してゐるのであつて支持したり賛成する者は極めて稀である（後略）（『美濃大正新聞』6月29日）

と述べている。また，同教会の浅倉牧師による投書にも同様の言説が見られる。

（美濃ミッション事件を）われらとは全然その主義主張を異にするある特種の組織の一外人個人経営たるキリスト教団がとつた部分的不祥事件とのみに限定すべきであり（中略）愛する美濃ミツシヨンの方々が蒙を啓かれ我国体と神社を正しく認識され（中略）んことを希ふ（『美濃大正新聞』7月2日，4日，括弧内は筆者による）

こうしたキリスト教関係者による批判は，言うまでもなく美濃ミッションへの迫害が自身に及ぶことを恐れてのものであると考えられる。と同時に，当時のキリスト教会における主要かつ多数派の言説を反映したものでもあった[23)]。

(3) 有識者による陳情活動と幼稚園閉園運動

大垣市の市議会議員や在郷軍人会，学校関係者といった地域の有識者は，「学童神社参拝拒否問題研究会」（以下，「研究会」と呼ぶ）を組織し，美濃ミッションの排除に向けた陳情活動を展開していった。この団体については史資料の制約などから，どの程度の規模で活動していたのか必ずしも明らかではないが，新聞記事からある程度様子をうかがうことができる。8月22日の『岐阜日報』によれば，この組織は「△会長陸軍中将上田太郎氏　△副会長興文会長杉山米治氏，東小学校交友会長佐久間仁左衛門氏　△幹事歩兵大佐野田豊，市会議員塚越翠，東海中学校教諭倉橋賢次三氏　△評議員伊藤在郷軍人連合分会長其他三十名」によって構成されていたという。

このうち，会長の上田太郎と幹事の塚越翠らは，基督幼稚園と美濃ミッションの閉鎖を岐阜県や国に陳情したことが次の記事から明らかである。

大垣市における美濃ミツシヨン問題は其後ますゝ険悪化し（中略）上田太郎中将をはじめ海軍大佐松永盛，市会議員塚越翠の三氏は神野視学とともに十五日午前出県，県庁に宮脇知事，北里学務部長等を歴訪，大垣市における情勢を述べこの際速に閉鎖命令を発して貰ひたいと種々陳情するところあつた。（『美濃大正新聞』7月16日）

このように，7月の段階では基督幼稚園，そして美濃ミッションの排除について報じられている。ただし，8月以降になると報道の焦点は，基督幼稚園の閉園に限定されたものになる。

美濃ミツシヨンの無認可教会は愈々不認可と決定した旨宮脇知事から発表されたのに対し同所排斥運動の中心である大垣市の各種団体は，県当局の強硬なる態度を感謝しつゝあるが更に一段を進めて幼稚園の閉鎖に向つて邁進すべく東島市長は右件に関し，一日出県宮脇知事，北里学務部長と懇談する筈である。一面本

県選出大野代議士は重大問題なりとして文部省方面への民意反影運動に努めて来たが近く帰県其後の情況を聴取し県並に文部当局を動かすべく第二段の活動に入る旨学童神社参拝拒否問題研究会員に激励的書面を寄せて来た。(『岐阜日報』8月1日)

この記事からは,「研究会」とともに岐阜県選出の衆議院議員大野伴睦もまた，美濃ミッションの排除を望む大垣市民の「民意」を反映するよう，文部省に働きかけていたことが分かる。大野はこの記事の数日後，岐阜日報によるインタビューで次のように答えているが，ここからも，大垣市民による美濃ミッション排撃運動がいかに正当なものであるかをナショナルな文脈で主張していたことがうかがえる。

（前略）美濃ミツシヨン問題の経過報告の為め来垣した大野代議士は記者に語る。本問題発生以来文部省方面に対し，大垣市民諸君の意のある処を伝へて迅速に之が解決を計つております，事国家に関する重大問題であり，（中略）一昨日宮脇知事を訪れ昨日は当市を訪れましたが美濃ミツシヨンの看板は日ならず取りはづされる事と思ひます。而して幼稚園の閉鎖は手続上の関係もあることゝて稍面倒な問題であらうが，此の上は市民諸君が合法的の実力閉鎖によることが尤も適当でないか，即ち市民の自覚を促し速に幼稚園の退園届を提出せしめ，ミツシヨンに出入するものを監視し好意的忠告をなすこと，排撃思想を一層徹底せしむるため各自意思表示せしむること等の方法を講じ，更に全国的に経過報告をして神社参拝を拒否する様な思想を国内から撲滅すると同時に此際愛国的観念を強調することが最も緊要だと思ふ。(『岐阜日報』8月6日，傍点筆者。)

他方，中小学校のPTA組織であった興文会や「研究会」が中心となって，幼稚園の退園届けに保護者をして捺印させたことが次のように報道されている。

セデー・リー・ワイドナー女史の経営する幼稚園の実力閉鎖の第一歩として，大垣市中小学校の後援会たる興文会では幼稚園児童の退園届を印刷各戸を訪問して，これに捺印を乞ひ取纏めて手交すべく其運動に着手した，市内各小学校の後援会も同一歩調に出る模様であり，一面法規による閉鎖も困難でないものと見られるので，同問題研究会が中心になつて材料を蒐集，県へ提供することゝなつた（後略）（『岐阜日報』8月8日）

ただし，この閉園運動のみならず，幼稚園児の保護者の多くが美濃ミッション児童の神社参拝拒否に対して「呆れ果て」て，子どもを退園させたこともあって（『美濃大正新聞』7月23日），9月の段階で園児の数は殆ど皆無であった。その後基督幼稚園は，翌1934（昭和9）年1月に正式に閉園したのである。

興文会や校友会（東小学校PTA）はまた，図4のようなポスターを作成し，美濃ミッション排撃運動を展開した。9月1日の『名古屋新聞』に「（前略）大垣市各校父兄会，後援会，校友会の各団体は前記三児童に停学処分をこばむが如き校長あらば直ちに全校同盟休校せしむるとの空気が漂つていた」とあるように，興文会や校友会等のPTA組織は，神社参拝拒否の3児童への停学処分を学校側に要求した。その結果，神社参拝を拒否した3児童には義務教育の期間にも関わらず，停学処分が下されることになったのである。

以上，美濃ミッション事件に大きく関わっ

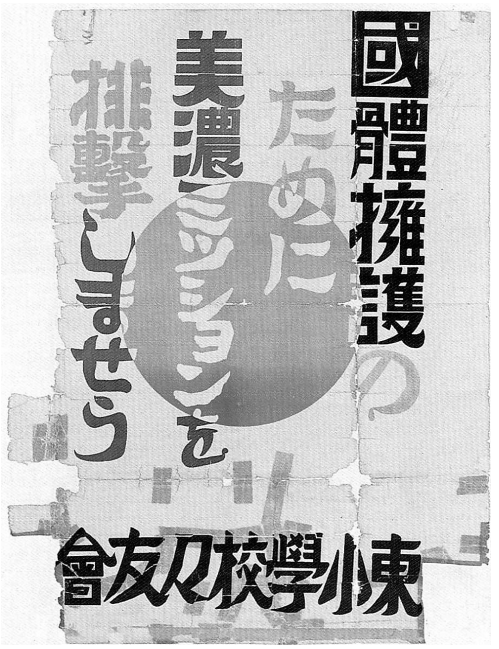

図 4　美濃ミッション排撃を呼びかけるポスター

注：美濃ミッション所蔵。

た諸アクターと，その活動並びに言説について，主に地元紙の記事を用いて明らかにしてきたが，美濃ミッションの排撃と基督幼稚園の閉園，言い換えれば美濃ミッションとそれに付随する基督幼稚園の社会－空間的排除を正当化した論理とは一体どのようなものであったのだろうか。次章ではこの点について考察してみる。

Ⅳ．美濃ミッションをめぐる社会－空間的排除の論理

前章で見てきたように，大垣市の諸アクターや市民は，美濃ミッションの信者や教会関係者による神社参拝拒否の態度を，国体を脅かす危険な行為であると見なし，美濃ミッションの排撃に向けた様々な取り組みを行っていた。しかしながら，美濃ミッションは，果たして設立当初から事件発生までの間，一貫して「異なるもの」として忌み嫌われ，排除され続けてきたのであろうか。

最初に美濃ミッション事件が起こった1930年の３月13日付けの『美濃大正新聞』紙上には，木村作次郎大垣市議会議長による「大垣市郭町に基教幼稚園を経営するワイドナー氏に対し市からも相当の補助金でも出してこれが助成をなし感謝せなければならないと思つてをつた」との発言が報じられていたことに注目すべきである。この発言は言うまでもなく，美濃ミッションの幼稚園経営について感謝しなければならないと思っていたのに，神社参拝拒否で裏切られた気分であるという皮肉を表わしている。しかしながら，木村作次郎のこの皮肉とも取れる発言の背景には，一連の事件以前の美濃ミッションに対する感謝の念が込められているとも考えられる。

また，木村作次郎の息子で学校教員の木村知常は1933年７月23日の『美濃大正新聞』への投書の中で「（ワイドナーが岐阜県で布教を始めた動機は）岐阜県に醜業婦が最も多い事を知り，不幸な同性に対する同情に基づいたものである（中略）（ワイドナーの）さういふ高潔な心情に対しては何人も尊敬を払ふのが至当である」（括弧内は筆者による）と述べている。

これらの記事から，美濃ミッションは事件以前，必ずしも排除の対象であったわけではなく，教育などの公的な活動を通じた地域社会への貢献がある程度肯定的に評価されていたことがうかがえる。なお，廃娼運動に関しては，現代のジェンダー研究では批判されることが多いが，当時は一部の有力者から肯定される側面があったことも付言しておく。

一方で，美濃ミッションという場，すなわち戸田伯爵家老屋敷という地元の名士が所有していた場においては，一定の社会的影響力を持った外国人宣教師や元教師，元看護師といった日本人スタッフと在日朝鮮人・寡婦・孤児・出稼ぎの女性労働者とが同じ「場」にあって一つの生活世界を構築し，キリスト教

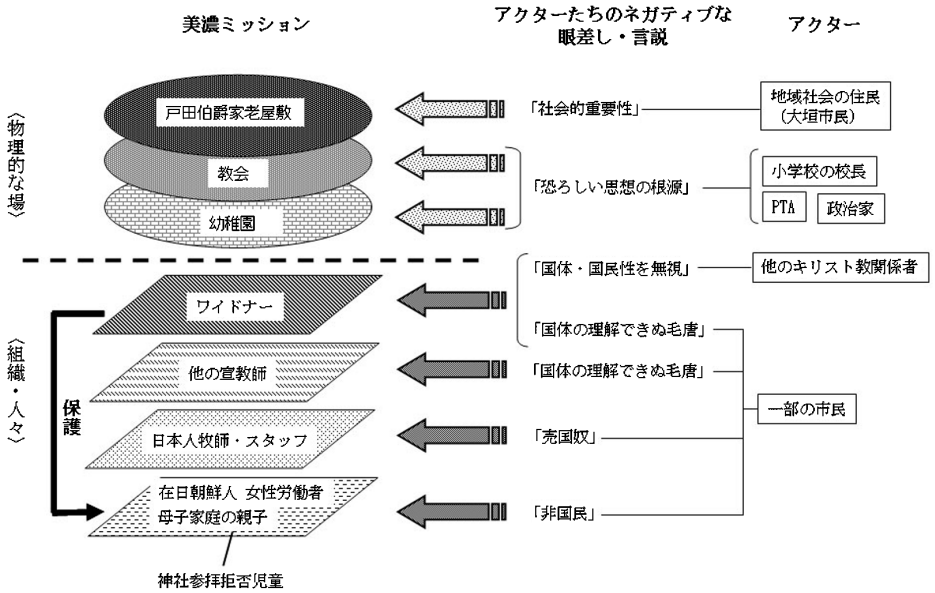

図5　美濃ミッションの構成と周囲の眼差し

信者としての生活を実践していた(図5)。しかも，基督幼稚園には社会的地位が比較的高い家庭の子どもたちが通園していたのである。

美濃ミッションのこうした生活世界が展開されていた戸田伯爵家老屋敷は，フーコー(Foucault, M.）が提唱した「ヘテロトピア」(Heterotopias)[24] として大垣市民の目に映っていたのではないだろうか。ヘテロトピアとは，「社会的に排除された，もしくは排除される傾向・要素を相対的に多く持ち，なおかつ『普通・日常』の（と多くの人々が認識する）空間の中では互いに出会うことがほとんどない人々が同時に存在し得る空間ないし場所」という意味を含む空間概念[25] として理解される。

すなわち，美濃ミッションが活動の拠点とした戸田伯爵家老屋敷は，「普通の」社会から日常的に排除されていた人々を包摂する空間であった。と同時に美濃ミッションは，幼稚園経営や廃娼運動といった社会的な貢献を行なう集団という一面も併せ持っていたが，キリスト教という，近代天皇制イデオロギーに対して「異質な」思想を背景とした存在であったことを忘れてはならない。

事件のアクターたちは，美濃ミッションが設立当初から地域社会の上層階層と関わると同時に，当時の社会にあって周辺化された人々を包摂していくこうした過程を見て，日常的なレベルの「忌避」意識を次第に抱くようになっていった。換言すれば，アクターたちは美濃ミッションを「異なるもの」として「そのつどあらたに発見」[26] していったのであるが，そこに神社参拝拒否というインパクトの大きい言動を通じて，反国家的・反社会的な差異を見出し，美濃ミッションを排除すべき「異なるもの」と見なしたのではないだろうか。

その結果，美濃ミッション並びに基督幼稚園の排除に向けた一連の活動が大野伴睦やPTA組織をはじめとする諸アクターたちによって行われたが，その背景となった言説について，２つの注目すべき記事を基に，考察

してみよう。

1つ目は，7月16日の『美濃大正新聞』の記事中にある「伏魔殿美濃ミツシヨン」という言葉であるが，字義通りに解釈すれば，美濃ミッションという教会とそれに付随する基督幼稚園は魔物が潜む恐ろしい空間，ということであろうか。

「恐ろしい空間」と表象された美濃ミッションを別の言葉で表現したもう1つの記事は，8月23日の『岐阜日報』に掲載された中・東両小学校校長へのインタビューである。

> 神社参拝拒否の三児童に小学校令第三十八条を適用して出席停止を命じた大野中，堀部東の両校長は暗然と涙を呑んで其顛末を記者に語る（中略）教育者の立場として自責の念に打たれると共に恐ろしい思想の根源美濃ミツシヨン排撃の為めに努力さるゝ憂国の士に対して敬意を払つて居ります。（傍点筆者）

大野伴睦や小学校校長並びにPTAといった諸アクターたちにとって，美濃ミッションとそれに付随する基督幼稚園は，地域の子どもたちに神社参拝拒否という反国家的な思想を教育する「恐ろしい思想の根源」であった。

前述の通り，基督幼稚園は1933年9月の段階で幼稚園児のほとんどが退園しており（『岐阜日報』9月12日），実質的に閉園状態であった。また，この時期になると，美濃ミッションをめぐる排撃運動をはじめとする表立った「事件」に関する報道も減少している。

すなわち，アクターたちは，「恐ろしい思想の根源」の1つであった基督幼稚園が閉園することによって，地域の子どもに反国家的思想が教育される可能性が消滅ないしは低下したと考えたのではないか。換言すれば，アクターたちが抱いていた，美濃ミッションの社会－空間的排除の必要性・緊急性が，薄れたのではないだろうか。そのため，表2にあるように，美濃ミッションが1940（昭和15）年に活動を中断するまで,一連の「事件」のような表立った排撃を受けることなく，宗教活動を行っていたと考えられる。

無論，アクターたちは一連の事件の中で美濃ミッションに対して，「忌避」感や「恐怖」を抱いていたのは言うまでも無い。特にアクターの中でも，地元メディアや有識者，行政関係者は「国体」という既存の秩序が破壊されることを恐れたであろう。他方，大垣市民もまた行政や地元メディアと同様に，美濃ミッションの反国家的態度に対して「恐怖」感を抱いていた。と同時に，自分自身が美濃ミッションあるいはその関係者と同様に反国家的であると見なされることや，大垣市そして日本からの社会－空間的排除の対象となることに「恐怖」感を抱いていたとも考えられるが，ここではその可能性を述べるにとどめておく。

Ⅴ．おわりに

本稿では，1930年代前半に岐阜県大垣市において生じた「美濃ミッション事件」を事例として，特定の宗教集団が「異なるもの」として意味づけられ，社会的そして空間的に排除される過程とその論理について考察してきた。

美濃ミッションは1918（大正7）年に大垣市でアメリカ人宣教師ワイドナーによって設立されたキリスト教プロテスタント系の宗教集団である。美濃ミッションは通常の布教活動と同時に幼稚園を経営し，市会議員や医者の子どもが通っていた。他方で，美濃ミッションという場は，在日朝鮮人・女性労働者・寡婦・母子家庭の親子といった，当時の社会において蔑視され，周辺化された人々をも同時に包摂する空間でもあった。すなわち，美濃ミッションは，「社会的に排除されたもしく

は排除される傾向，要素を相対的に多く持ち，なおかつ『普通』・『日常』の（と多くの人々が認識する）空間の中では出会うことがほとんどない人々が同時に存在し得る空間ないし場所」，まさにフーコーが言うところのヘテロトピアとして地元社会から日常的に見なされていた。

そこに神社参拝拒否という，当時の日本にあっては「反国家的・反社会的」な態度を信者がとったことで，地域社会全体を巻き込んだ排撃運動，「美濃ミッション事件」が生じたのである。

この事件では市議会議員等の有識者や国会議員，PTA組織や市民といった多様なアクターが美濃ミッションの排除に向けた様々な運動を展開していった。その背景として，彼らが美濃ミッションに対して抱いていた「忌避」や「恐怖」といった表象・言説が存在していたことが当時の新聞記事を通してうかがうことができる。それは，一連の事件の中で，基督幼稚園が閉園すると同時に美濃ミッション排除の表立った運動自体も自然に終息していったことと深く関係しているのではないだろうか。

これらの事実から，美濃ミッションの社会－空間的排除を正当化した論理の背景として，「異なるもの」への「忌避」・「恐怖」といった感情が１つには挙げられる。そして，アクターたちは社会的立場や地位によって異なる「忌避」・「恐怖」感を抱き，その結果，美濃ミッションをめぐる排撃運動や言説において，アクターごとに差異が生じたと考えられる。

最後に今後の課題を２点挙げておく。

第１に史資料の制約についてである。大垣市史や岐阜県史，帝国在郷軍人会会報などの資料で美濃ミッション事件に関する言及が皆無であったことと，事件の時代が戦前期であったことから，美濃ミッション以外での調査が困難であった。

そして第１の課題とも関連するが，美濃ミッション設立の際に，ワイドナーが戸田伯爵家老屋敷地を借り受けた経緯や，1930年当時の大垣市民が戸田伯爵家老屋敷に対してどのような意味づけを行っていたのかについては，史資料の制約のために明らかにすることができなかった。これらの点を明らかにすることで，美濃ミッションと地域社会の相互関係の構築過程を描き，事件をより詳細に分析することが可能になるのではないか。

これらの問題点については，稿を改めて検討していきたい。

（立命館大学文学研究科・院生）

謝辞

本稿は2006年に立命館大学に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものです。この研究を進めるにあたって調査にご協力いただきました美濃ミッション冨田浜聖書教会の石黒次夫，石黒イサク両先生をはじめとする美濃ミッションの方々に心からお礼を申し上げます。また，立命館大学地理学教室の先生方，院生の皆様，歴史地理学会をはじめとする様々な学会において諸先生方からの御指導，御鞭撻を賜り，感謝申し上げます。

なお，英文要旨は日本バプテスト宣教団のShan Reed宣教師に校閲していただきました。この場を借りてお礼を申上げます。

本稿の一部は2006年３月の歴史地理学会例会（修論発表会）と2006年11月の人文地理学会大会にて発表しました。

〔注〕

1）赤坂憲雄『排除の現象学』，洋泉社，1987，75頁。

2）前掲1）173～211頁。

3）中村生雄「まえがき」（赤坂憲雄・中村生雄『排除の時空を超えて』，岩波書店，2003），５頁。

4）例えば宗教社会学では① 森岡清美『日本人の行動と思想８　日本の近代社会とキリスト教』，評論社，1971，340頁や②小栗純子『日本人の行動と思想７　日本の近代社会と天理教』，評論社，1969，308頁，さらに地

理学では③藤村健一「新宗教教団・大本の聖地の建設と再建」地理48-11，2003，29～35頁，　④Simon, N. and James, R., “The mosque in the suburbs: negotiating religion and ethnicity in South London,” *Social and Cultural Geography*, 3-1, 2002, pp.39-59等が挙げられる。

5）前掲1）75頁。

6）エドワード・W・ソジャ著，加藤政洋訳『第三空間　ポストモダンの空間論的展開』，青土社，2005，13・19・88～210頁。

7）Sibley, D., *Geographies of Exclusion: Society and Difference in the West*, Routeledge, 2003, p.183.

8）今回は岐阜県の地元紙である『美濃大正新聞』と『岐阜日報』，そして『大阪朝日新聞』，『読売新聞』，『毎日新聞』，『名古屋新聞』を用いた。

9）聞き取り調査による。

10）『美濃ミッション設立願書類綴』によると，1930年の時点で教会・伝道所が各6ヶ所，聖書学校1校の計13施設を有し，一般信徒・牧師・宣教師や保母などの教団関係者の合計が141名という規模であった。また，牧師やスタッフの中には，美濃ミッション入団以前に他の教会で牧師を務めた，あるいは教師や看護師として働いていた人物が複数存在していた。

11）『大垣市史　中』,大垣市役所，1930，599～631頁による。

12）平岡昭利・野間晴雄編『中部Ⅰ　地図で読む百年　愛知・岐阜・静岡・山梨』,古今書院，2000，51～56頁による。

13）ただし，美濃ミッションの活動経過における信者の社会階層の時系列的変化については，史資料の制約上不明である。

14）前掲11）597～598頁によると，美濃大正新聞の経営者は，当時の大垣市議会議長を務めていた木村作次郎であった。木村が市議会で美濃ミッションの神社参拝拒否の態度に対して批判的な意見を述べたことが1930年3月13日付けの美濃大正新聞で報じられているが，このことと美濃ミッションをめぐる美濃大正新聞による一連の報道との関係については，「事件」の翌年になってから報道され始めた背景・理由を含め，史資料の制約上不明である。

15）例えば，1930年4月25日の美濃大正新聞には「ワイドナー事件で市会義憤に燃ゆ」という記事がある。

16）聞き取り調査による。

17）1930年の事件とは別の児童。

18）その後，3児童が転校先でも神社参拝を拒否したかどうか，また排撃に遭ったかどうかに関しては，史資料の制約上不明である。

19）美濃ミッション編『神社参拝拒否事件記録復刻版』，美濃ミッション，1992，220～222頁。

20）以上の経緯は前掲8）の各新聞記事と前掲19）ならびに 石黒イサク「『美濃ミッション事件』をめぐって」（櫻井圀郎・石黒イサク・上中栄・瀧浦滋『日本宣教と天皇制』，いのちのことば社，2001），49～85頁による。

21）①赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』，校倉書房，1985，201～202頁と②高瀬幸恵「1930年代における小学校訓育と神社参拝―美濃ミッション事件を事例として―」，日本の教育史学50，2007，58～70頁による。

22）前掲4）③29～35頁による。

23）鈴木範久『日本キリスト教史物語』，教文館，2001，176～188頁による。

24）ミシェル・フーコー著，工藤晋訳「他者の場所－混在郷について」（小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成Ⅹ　1984-1988倫理/道徳/啓蒙』，筑摩書房，2002），276～288頁。フーコーは，この概念についていくつかの定義を述べているが，それらは矛盾や食い違いを含み，理論としての完成度が必ずしも高いとはいえない。

25）加藤は，地理学やカルチュラルスタディーズ，文化人類学等の研究者によって，ヘテロトピアの定義が様々であることを指摘している。加藤政洋「『他なる空間』のあわいに」，空間・社会・地理思想3，1998，1～17頁参照。

26）前掲1）75頁。

The Process of the Socio-Spatial Exclusion of Religious Groups: The Case of the "Mino-Mission Incident" in the 1930s

ASO Tasuku

This article aims to analyze the logic that caused the Socio-Spatial exclusion of heterogeneous Religious Groups and highlights a group of Christianity called the Mino-Mission.

The Mino-Mission was one group of Christianity that was established in Ogaki City, Gifu Prefecture in 1918. The founder was Sadie Lee Weidner who was an elementary school teacher who also acted as the principal of Miyagi-Jogakko from 1900 to 1913. She then returned to America to prepare for evangelism in Japan. In 1918, she came back to Japan and established a church in the mansion of Earl Toda who was once a feudal lord. Afterwards, she named the church the Mino-Mission and extended the scale of it. In 1930, the Mino-Mission had 12 churches in West Gifu with 20 staffs and 141 believers.

At the same time, Weidner ran a kindergarten which the children of doctors and members of the municipal assembly attended. Weidner also protected widows, women working away from home, families of mothers and children, and Koreans living in Japan. These people groups, recognized as heterogeneous, were discriminated against in Japanese society in those days. The Mino-Mission also gradually became recognized as Heterogeneous by including these groups.

This article especially focuses on "Heterotopias" by Michel Foucault. Heterotopias mean the spaces or places in which Heterogeneous people groups, who don't meet with "general" society, exist at the same time. The Mino-Mission had the characteristics of "Heterotopias".

In June, 1933, some children who belonged to the Mino-Mission rejected worshipping at Ise-Jingu. Some of the children who rejected worshipping went to Naka-elementary school, one of the five elementary schools in Ogaki city. The principal of the elementary school explained the problem to their mothers and Weidner. However, they expressed their beliefs and rejected the principal's teaching. Some local newspapers reported this series of events from June to September. During this period some people persecuted the Mino-Mission.

Well-informed local people criticized the Mino-Mission in local newspapers. They also organized one group and petitioned the Japanese government and the Gifu prefectural office to exclude the Mino-Mission from Ogaki city and Japan. The group also gave some lectures to the citizens of Ogaki city on excluding the Mino-Mission.

The PTA of Naka elementary school asked the parents of kindergarteners to write Returning-from-kindergarten reports and submit them to the Mino-Mission. Some people recognized the kindergarten of Mino-Mission as "the space of the origin of fearful thought". They also recognized that the Mino-mission was a dangerous group and should be excluded from Ogaki city and Japan. And as a consequence, the kindergarten was closed.

Key words: the Heterogeneous, Socio-Spatial Exclusion, Mino-Mission, Ogaki City, Heterotopias